

森林再生小委員会が、実施していること。これから実施したいこと。

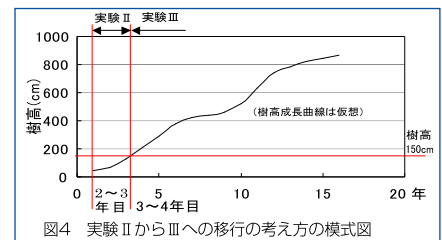
達古武地域森林再生について

森林再生モデル地区(カラマツ人工林)の自然林再生実験

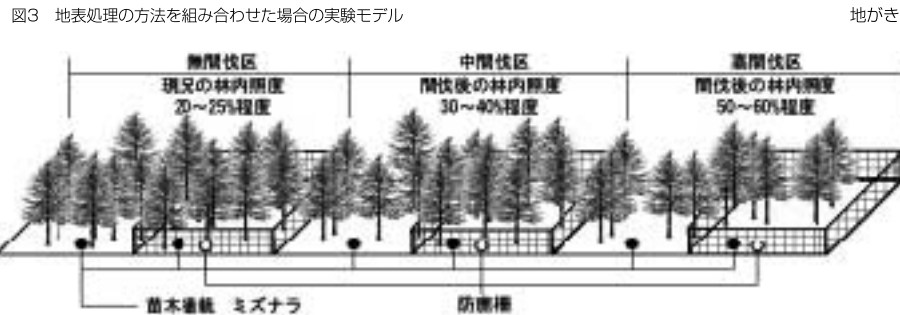
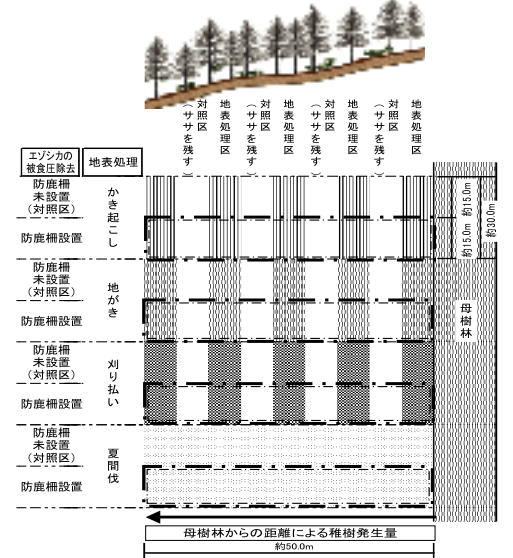
達古武沼北部のカラマツを主体とした林相を有している地区を対象に、生物の多様性及び森林機能を総合的に高めるため、伐期に達したカラマツ人工林を、地域本来のミズナラなどの落葉広葉樹を主体とした自然林に再生します。

平成16年度は、広葉樹稚樹の発生・成長の阻害要因を独立に検証することができる実験区を設定しました。今後、各実験区のモニタリングを実施し、阻害要因と対策について評価を行います。

実験Ⅱ：稚樹の樹高がササを超えた段階でエゾシカの被食の影響を検証
 実験Ⅲ：幼木(樹高150cm以上)の段階でカラマツを間伐した場合の影響を検証



実験Ⅰ：稚樹の発生段階で阻害要因(動物による被食、ササの被覆、種子の不足)の検証



このようなことが話し合われました
 ●委員長 ●委員 ●事務局

- この実験区でやっている仕事をいつの段階で全体に移行していくかというスケジュール的な問題は、どう考えているのか。
- 実験の結論をある程度予測したなかで、複数の年次スケジュールを検討していく必要があると考えている。
- かき起こしとか地がきをやった部分に、ササがまた侵入してくることが考えられる。その場合ササの扱いはどうするのか。
- 基本的には初期条件だけ揃えて侵入したあとは放っておく。という考え方でいきたい。
- 将来この実験のように、高い間伐率を設定する地点が、保安林や例えば道有林での公益的な地域に指定されていた場合に、その施策指針などに触れることはないか。

- 道有林での森林作業は公園区域などの中で行っているため、大きく空間を開けられない。道有林では間伐率45%は想定していない。
- かなり間伐率が高くなると、風によって倒れるおそれがある。現実に過去にそういう被害もあり、高間伐率というのは場所によっては難しい部分がある。
- 昔の時代に決められた保安林の制度が、拡大造林期を経た現在の人工林の維持管理などを議論していく時にあてはまるのか疑問だ。
- 湿原再生では、釧路湿原の流域全体というところで論じ統制の取りにくい民有林の扱いを論じなければ意味が無いのではないか。
- 会社有林では、経済目的というのが一つあるが、わが社では森のリサイクルということとをうたっており、社会的責任も強く感じている。会社有林としてはこういったニーズに沿っていく必要があると考えている。

- おそらくカラマツ林は、水源涵養機能や土砂流出防備機能が低いということはない。ただ鬱閉したカラマツ林だと種の多様性が低いなどという現象は起こりうる。どの地区をカラマツ林として維持し、どの地区を広葉樹として自然林に戻していくのか、といった区別を議論しないとイケない。木材生産としてのカラマツ林でも下層の植生の部分では多様性を維持していく。そんな森林を目指していく方向性もある。
- どうやったら民有林も生態系の視点で管理していけるかということ、官、民とか市民団体とかで議論し、お互いに協働できる所があったら進めていければと思う。
- 情報をオープンにすることで、ある意味の粗い森林の管理の仕方についての歯止めがかかると思う。

森林再生モデル地区(塘路64地区)の森林再生試験

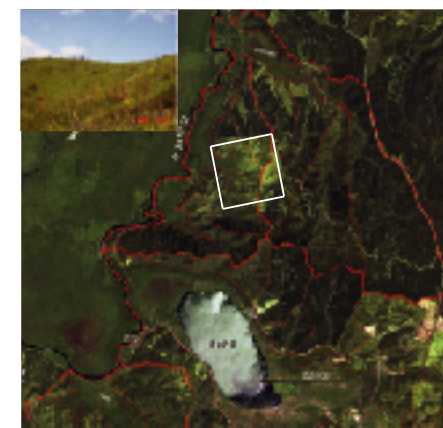


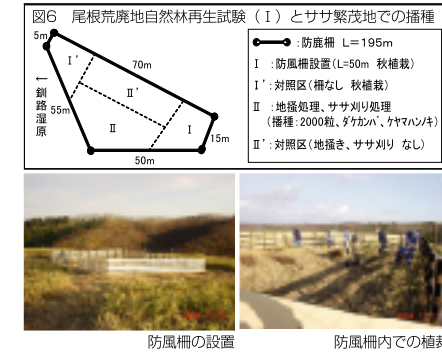
図6 尾根荒廃地自然林再生試験(Ⅰ)とササ繁茂地での挿種

これまでの調査で明らかになった、この地区での森林植生回復を阻害している要因(①~④)を緩和する試験を行いました。

①エゾシカによる被食緩和
 被食圧が高い南西斜面のミズナラ萌芽樹を材質の違う3種類のネットで保護し、生長量を調査します。



②風衝害
 ほとんど立木のない尾根筋に防風柵を作り、3種類の樹種を植栽し、生長量を調査します。



③ササの被覆
 ササを刈り払いや根を掘り起こして除去しておき、播種して、発芽率、生長量を調査します。



④土壌欠損
 作業道沿いの土砂流出が見られる箇所、土砂流出緩和柵を設置し、土砂堆積量、周辺植生の回復状況を調査します。



このようなことが話し合われました
 ●委員長 ●委員 ●事務局

- 土砂流出緩和柵は、枯れた木とか間伐材などを利用して設置した。富士山麓では、水の勢いを防いだり浸食箇所を止めたりという成果が上がっているので参考にした。
- 山で、利用されない木を地表に置くとか、埋めるとかすると水道(みずみち)が若干暴れ、大きくせん掘されるような状況にならない。
- 下刈りを4年5年続けると何故か広葉樹が侵入してくるといった経験を持っている。明らかに萌芽とか天然更新があるとわかった段階で、下刈りの手法を変えてみるとうか。
- 地がきなり何なりをして、自然侵入を促進するようにしたい。

生態系指標調査を用いた評価とモニタリング調査

◆達古武地域全域における調査について

再生の評価は、生態系の質で評価するため、森林生態系を構成する動植物の調査を行い、どの生物が指標に適するかを検証しました。その結果歩行性昆虫と鳥類の中で、森林の発達初期に変化率が高い種があり、指標としての可能性が高いことがわかりました。

